

# 準拠集団と社会統制<sup>訳註1)</sup>

タモツ・シブタニ

(カリフォルニア大学サンタバーバラ校)

翻訳 後藤 将之

「準拠集団」の概念は、相互作用論者の理論ではいつでも中心的なものだった。だが、ハーバート・ハイマンが、1942年に公刊された研究の中で使うまで、社会心理学者の間では一般的ではなかった。それが言及しているのは、とりわけ選択がなされねばならない場合に、ある個人によって自分の行動の指針のために選択される価値の源泉、ということである。準拠集団は、その個人が構成員である集団でもありうるが、そうではない時もある。どのような場合にも、それは、関係する個人の行動に指針を与え、そのことによって社会統制の重要な源泉を構成する。シブタニ博士は、先行する章で提起された疑問をさらに追究する——「どんな他者なのか？」と〔原著でシブタニ論文の直前には、エヴァレット・ヒューズによる論文「どんな他者なのか？」が収録されている：訳註〕。いっそう一般に受け入れられた「準拠集団」という用語を採用しつつも、シブタニの議論は、なぜこの用語が十分に満足させるものではないのか（そして、どうしてローズが本書の序章で、代わりに「準拠関係」という用語を使ったのか）について、多くの理由を示している。準拠集団を社会統制と関連づけるにあたり、著者は、社会的価値の研究に関する独創的なアプローチを潜在的に示唆している。彼は、いかに準拠集団の概念が、異なった種類の社会過程に言及して使われてきたかを指摘する。そして、本書の一般的なオリエンテーションと一貫するように、それを定義している。〔以上は編者アーノルド・ローズによる導入的な解説である：訳註〕

どんな社会にもなんらかの種類の犠牲者がみられ、彼らは通例、好奇心の対象となる——悪罵のそれではないにしても<sup>原註1)</sup>。いっそう稀に

は、注目を集める者もいる——自分の小切手を無造作にブックマークに使う献身的な科学者、危険な山頂をめざして生命を危険にさらす登山家、隣人からの罵声のただ中でも熱心に自宅でバイオリンの練習をする少年といったように。こうした行為はさまざまに異なる説明をされてきたが、とりわけもっともらしい仮説は、ソローの有名な文章で示唆されるものだ。「ある男の歩調が仲間たちの歩調とあわないとすれば、それは彼がほかの鼓手のリズムを聞いているからであろう」〔『森の生活（ウォールデン）』の「むすび」の一節。この後、「めいめいが自分の耳に聞こえてくる音楽にあわせて歩を進めようではないか。それがどんな旋律であろうと、またどれほど遠くから聞こえてこようと」と続く。ここでは岩波文庫版（飯田実訳）の訳文を引用：訳註〕。ほとんどの個人は、自分の直接の周囲から何らか疎遠にされがちだが、完全な孤立の中で過ごす人もめったにいない。

非同調性のこうした極端な事例が、いっそう頻繁に見いだされる多様性の形式を研究する出発点となる。

故意に、直感的に、あるいは無意識に、個々人は何らかの観衆のために遂行している *performs for some kind of audience*。劇場でと同様、人生のドラマの中で、行為は、彼らの判断が重要だとされる人々に向けられる。我々のそのような複雑な社会にはきわめて多くの観衆がいるので、ある個人の行動を理解するには、その人がどれに向けて遂行しているかを特定することがしばしば必要となる。近年の「準拠集団」の概念の人気は、部分的に、それが、その場には明瞭に現れてこない観衆に向けられた行動を説明するのに有効だから、ということによる。

社会学者は、長い間、観衆に関心を寄せてきた。というのも彼らは、通例、社会統制との関連で行為を説明するからだ。「社会統制」とは、意図的な影響や強制というよりもむしろ、一般に、個人は自分が他者に帰属させた期待を考慮している、という事実をさしている。ある種類の観察結果が、準拠集団が持つとされる2つの「機能」のうちの1つ、準拠集団の「規範機能」と呼ばれるものとの関連で、説明されてきた (21、28)。だがそれは、長いこと親しまれてきた社会統制の理論を、現代大衆社会の支配的な条件に適用することで説明できるものだ。けれども、クーリー、デュエイ、ミード、パークそしてサピアの著作に含意されたことは、いっそう明示的に述べられなければならない。というのも、こ

これらの人たちのほとんどは、とりたてて大衆社会の研究を目指してはい  
なかったからだ。この課題は、(a) ある観衆に帰されたパースペクティ  
ヴと、(b) ある観衆を構成する人々とを、区別することによって推進  
される。

### パースペクティヴと自発的行為

何年も昔にトーマス (42, pp.154-155) は、ある個人がすることは、  
主としてその人の状況の定義に依存していることを指摘した。これに追  
加して、個人が一連の状況を一貫して定義する方式は、その人のパース  
ペクティヴに依存している、と言えるだろう。パースペクティヴとは、  
ある個人の世界の組織化された見方であり、ものごとと出来事と人間性  
の属性について、自明とされたことである。人間が住む環境は、実際に  
知覚されたものごとの秩序であるのと同じく、記憶され期待されたもの  
ごとの序列でもある。それには、何がもっともらしいものであり、何が  
ありうるのかについての仮定が含まれている。こうした秩序がなければ  
人生はカオス的になる。疑念ですらも、それが可能となるのは、疑問視  
されない準拠枠の内部においてのみである。こうしたパースペクティヴ  
を持つことで、人は、自分の変化し続ける世界を、相対的に安定した、  
秩序立って予測可能なものだと想定できる。リーズラー (33, pp.62-72)  
が指摘するように、人のパースペクティヴとは、アウトライン的なスキ  
ームであって、経験に先行して、それを定義しガイドするものである。  
ある人について知りうるもっとも重要なことのひとつが、その人が何を  
自明としているか、である (30)。

相互理解と調和した行為 *concerted action* が可能になるのは、ただ前  
提が共通して抱かれた時だけである。だが、パースペクティヴが他者と  
分有される程度はさまざまである。統合失調症の事例の多くでは、患者  
は明らかに、他の誰にも理解できない視点から状況を定義している。そ  
の人は何らかの観衆に向けて遂行しているが、それはおそらく、その人  
が自分の想像の中に構成した観衆である。パラノイア障害のある者はこ  
れほど孤立してはいないが、都合のよい性質が帰された擬人化  
*personification* から成り立つ疑似共同体の中で生きている (5, pp.372-  
447)。お互いに密接に結びついた人々の間には、もっと限られていない

パースペクティブがみられる。遠く離れた党派や家族でも、明瞭なオリエンテーションを発達させるだろう。そして小さな共同体を特徴づける見通しのことを「地方主義」provincialism とよぶ。

「文化」の概念が示すのは、特定集団内の人々によって共有されたパースペクティブということだ。レッドフィールドが使ったように (32, pp.132-133)、それが言及しているのは、このような「社会を特徴づける行為と人工物にあらわれる慣習的理解」のことである。こうしたパースペクティブを構成する理解が行為の前提を構成するので、同一の文化背景をもつ人々は、類似の活動パターンに関与する。

異なるパースペクティブをもつ人々は、環境の多様な側面に選択的に反応し、同一の状況を別のように定義する。スラム地区を歩いている売春者とソーシャルワーカーとは、別のものごとに気づく。何が知覚されるかは、主として何が予期されるかで決まる。このことについて実験による証拠が増えつつある。もっとも明らかにしてくれるのは、メキシコ人とアメリカ人の対象を比較したバグビーによる巧妙な実験 (1) である。彼は、立体眼鏡を通して見られる 10 組のスライドを作った。片方には、ほとんどのメキシコ人に馴染みのある対象の画像を載せた——マタドール闘牛士、黒髪の女性、小作農などを。反対側には、ほとんどのアメリカ人に馴染みのある対象の同様の画像を載せた——野球選手、金髪の女性、農夫などを。対応する写真は、輪郭、基本構成、光と影の配置などで相互に類似していた。いくつかの例外はあったが、概してアメリカ人はすでに自分たちに馴染みのあったものだけを見たとし、同様にメキシコ人は自分自身の文化の中にある光景だけを見た。こうして、知覚の手がかりの選択と解釈は、驚くほどまで、集団に参加する間に形成された期待に依拠していた。いかなるパースペクティブの変化も——新しい文化に馴染むことや、あと数ヶ月で死ぬだろうと分かるといった異例な経験によるものだが——以前には見過ごしていたものごとに人を気づかせ、同じ親しんだ世界を、別の見地から見るようにさせる。

ミード (27, pp.152-164) は、個別に動機づけられた人々が調和した行為に関与できるのは、各参加者が「一般化された他者」の役割を取得するからだと主張した。個々人は、そのやり取りの参加者に共有された視点から知覚し、判断し、自己を制御する。他者と同一のパースペクティブから自己イメージを形成するので、人は自分がしたいことへの彼

らの反応を予期できるし、得策でない衝動は抑止できるし、こうして受け入れ可能な線にそって自分の行為をガイドすることもできる。したがって、個々の社会化された個人とは、ひとつの社会の縮図 a society in miniature である。ひとたび自分の集団の文化を取り入れれば、それが、その人のパースペクティブとなる。そして、この準拠枠を、自分が出会うあらゆる新状況に耐えるように持ち込むことができる。ほとんどの人がこのように自己制御できるという事実が、社会を可能としている。この関連で強調されるべきことは、ミードが「一般化された他者」について語ったとき、彼は、人々についてではなく、共有されたパースペクティブについて言及していたということだ。

ある人がすること、あるいはするのを拒否することの多くは、その人が、自分自身をどんな人間とみなしているかに依存する。階級意識の研究がこれを明らかにしてくれる。ゴールドシュタイン (15) は、労働組合の研究において、構成員である技術者の大多数が、ストライキと苦情処理手続きと政治活動に反対していることを発見した。これらの人々は、中流階級のパースペクティブから自分たちの自己イメージを形成しており、組合活動を、工場労働者とは違うように定義していた。1952年の大統領選挙の投票パターンの研究において、ユーロ (12) は、ある人が投票する仕方は、観察者が外部の基準との関連でその人を位置づけた階級よりも、当人が自分と同一視する階級に、いっそう依存していることを発見した。

「準拠集団」の概念は、いくつかの方法で使われてきた。だがそれは、その集団について仮定されたパースペクティブが、個人の知覚領域の組織化における準拠枠として、その個人によって用いられる集団を指示するときに、最も有効になる。このように定義すれば、あらゆる種類の単位が準拠集団になりうることは明らかである。たやすく特定できる組織された集団だけに注目を限定すべきではない。ある人がそれに向けて遂行する観衆は、単一個人でも、その人と持続的な接触をもつ少数の人々でも、自発的結社でも、あるいは何らかの人々の広範なカテゴリ——社会階級、職業、人種集団、または何らかの共同体でもありうる。準拠集団とは観衆なのであり、現実または想像上の擬人化からなり、それに対して一定の価値が帰属されるのである。それは、ある個人がその前で、自分の立場を維持したり強化したりしようとする1つの観衆なのである。

人間が、集合的な立場からものごとを考え、感じ、そして見るというのは、昔からある主張であり、人類学者と知識社会学者によって、繰り返し強調されてきたものである。それではなぜ、過去数十年間に、準拠集団への突然の関心が起きたのだろうか？ 関心は明らかに、大衆社会の固有の特徴から生じている。つまり、マスコミュニケーションのメディアを通して結びつけられた社会、ということだ (45, pp.368-391)。一定数の学者が、大衆社会は組織を欠き、群集の特徴の多くを持っていると主張してきた。だが、詳細に検討してみれば、それが実際には、個々の文脈における無数の個人的な執着と道徳的な義務とで結びつけられていることが分かる (37)。大衆社会は多元的である。全体主義体制下においてすら、政治権力は中心化されていても、社会統制は脱中心化されている。一定の問題が生じるのは、このような複雑な社会では、人々が、時にはその時点で明示的に自分が参加していない集団や、時には自分が構成員だと認識されていない集団や、また時にはまるで実在しない集団の、規範を利用するからである。

大量の文献の中で、「準拠集団」という用語は、個人が自分の運命をそれと比較する集団のことを指示している。これがもう1つの用法〔準拠集団の比較機能：訳註〕であるが、語の「正しい」意味について論争してもほとんど何も得られない。けれども、比較点とされる集団と、その文化がその個人の視点を構成している集団とはまったく異なる。これを認識することが重要である。個人が馴染んでいるどんな都合のよい集団であっても、比較のために使われうるだろう。人はまた、自分自身、別の個人や、あるいは物差しのような非人称的な測定基準とも比較するだろう。けれどもスターンとケラー (40) が述べたように、人々が集団間の相違を意識するという事実は、彼らに外部者の視点を採用させるわけではない。たとえ他者の方が景気がよいと信じられる場合であっても、である。それどころか、ポット (2, pp.159-216) がその英国家族の研究で示したように、ひとはこうした集団について、たいして知らなくてもかまわない。というのも、どんなステレオタイプの認識でも事足りるからだ。何人かの著者 (21: 28, pp.283-284) は、さらに進んで、準拠集団は「規範機能」と同様に「比較機能」も持っていると主張してきた。同一の概念について2つの並行的な「機能」を語るということは、その現象が、その「機能」以外のあらゆる点で類似していることを含意する。

表面上でいくつかの類似点があっても、このことは当てはまらない。これらの集団は、同一条件下で形成されたのだろうか？ 人々は、同一の方式で自分の規範を獲得するのだろうか？ それらは同一の環境下で変化するのか？ 不幸なことに、2つの異なる過程に言及するために同一のラベルが使われており、それらを結びつける試みは、すでにある混乱を増大させるだけである。ターナー (43) は、集団が判断の形成に関与するようになるいくつかの方式をリストしている。そして言うまでもなく、それらの各々は、別のシンボルでラベル付けされるべきである。

### 大衆社会における文化的多元主義

デュエイ (8, pp.166-207)、パーク (30, pp.36-52) およびサピア (35, pp.104-109) は、社会がコミュニケーションを通してその中に存在することを強調した。分有されたパースペクティヴは、共通のコミュニケーション・チャンネルの産物である。この命題は頻繁に復誦されるが、にもかかわらず、とりわけ大衆社会の分析にとってのその十分な含意は十全には評価されてきていない。見通しにおける変異は、他とは異なる接触と連合を通して生じる。社会的距離の維持——差別や、紛争や、あるいは単に別の著作を読んでいることによる——は、明瞭な文化の形成をみちびく。こうして異なる社会階級の人々は、類似しない生活様式を発達させるが、それは経済的地位に内在するなものかゆえではなく、職業の類似性と、彼らに限られた一定のコミュニケーション・チャンネルを課す所得水準が設定した限定による。ある社会学者たちは、アメリカ人の生活の多くの部分に触れていない。それは彼らが、とりわけテレビといった多くのマスメディア番組を回避したり、あるいは見下してしか接触しないからだ。前衛派が「コスモポリタンの」だと考える見通しさえもが文化依存的である。というのも、それもまた、限定されたコミュニケーション・チャンネルへの参加の産物だからである——書物、雑誌、講義、展示、そしてほとんどの中産階級には立ち入り禁止の酒場、といったような。

人類学者たちは、相対的に孤立した社会の研究において、地理的な表現での「文化圏 cultural areas」について、有意義に語るができる。こうした共同体では、個々の文化は領土的な根拠をもつ。というのも、

一緒に暮らす者だけが相互作用できるからだ。しかし、レッドフィールド (32) がユカタンの4つの共同体の比較研究で示したように、文化圏は、コミュニケーション・チャンネルと相互決定的である。現代産業社会では、高速輸送とマスコミュニケーションのメディアの発達ゆえに、地理的に分散した人々でも、きわめて効果的にコミュニケーションできる。コミュニケーション・チャンネルはいまや、文字が読めない人にとってすら、たやすく利用できる。これらのネットワークはもはや領土的な境界と一致しないので、文化圏は重なり合い、その生態学的な根拠は失われた。隣の住人はまったくのよそ者かもしれない。一般の会話でも、このようなパースペクティブの多様性について、直感的な認識がみられる。それで我々は、異なった社会的世界に住んでいる人々について有意義に語っている——大規模金融の世界、アカデミックな世界、子供の世界、あるいは演劇の世界について。

個々のコミュニケーション・チャンネルは明瞭な見通しを生じさせる。これらのチャンネルは、安定性、範囲、そして有効性について異なるので、社会的世界はまた、いくつかの次元で多様である。世界は、参加者の構成、大きさ、地理的分布についても相当程度に異なる。ローカルなカルトのようなものは小規模で凝集している。知識人の世界のようなものは広範であり、参加者は分散している。多くの人種的少数派のようなものは相対的に均質な人口をもつが、ほとんどの政党のようなその他のものは完全に混成的である。世界は、その境界の範囲と明瞭さにおいて異なる。それぞれは、何らかの種類の地平によって制限されるが、これは広かったり狭かったり、明瞭だったり曖昧だったりする。自分自身のパースペクティブを絶対的だとみなす人々もいるが、社会的世界が人間の宇宙と同一の境界を持つわけではないという事実は、通例、認識されている。下層世界にいる人々は、外部者が自分たちの価値を共有しないことを理解している。世界はまた、排他性と、参加者にどこまで忠誠心を要求するかの度合いにおいても異なっている。完全に自分自身を献身する人々だけに開かれる世界もある。ひとはパートタイムの修道女にはなれない。しかし、参加者の大多数が、単なるたまさかの傍観者でしかないその他の世界もある。

社会的世界は、団結性と、参加者によって感じられる同一化の感覚に關しても、相当に異なっている。おそらく最も強い団結の感覚は、さま



さまざまなサブ共同体に見いだされるだろう——下層社会、人種的少数派、社会的エリート、あるいは孤立した宗教カルトなどに。このような共同体はしばしば差別されており、この差別によって、内部的に親密な接触が増し、外部への障壁が強化される。もうひとつの一般的な世界のタイプは、相互に関連しあった自発的結社のネットワークからなりたつ——医療の世界、組織労働の世界、鉄鋼産業の世界、あるいはオペラの世界である。これらが結びつくのは、個々の地元内にあるさまざまな組織された集団によってだけではなく、『ヴァラエティー』や『CIO ニュース』や専門雑誌などの定期行物によってでもある。教会と友愛組織はしばしば独自の出版物をもっている。これらの世界のうち、よりよく組織されたものに職業のそれがあるが、それは時として、法律で誰にでも要求されるよりも、さらに厳密な倫理綱領をもつことがある。最後に、ゆるやかに結びついた特殊利害の宇宙がある——スポーツの世界、切手収集の世界、あるいは女性のファッションの世界である。参加者たちは、共通の限られた利害で折々に集まるだけなので、関与の度合いには、熱狂的な献身からときおりの関心までさまざまな程度がある。通例かなり大規模な参加があるので、スポーツやファッションやさまざまな娯楽領域での最近の展開は、気にとめる誰もがたやすく利用できるマスコミュニケーションのメディアで伝えられる。これらのアリーナはゆるやかに組織化されているにすぎないが、それでも参加者は、とりわけ、関心が強くまた持続しているときには、類似した行為の基準を発達させる。ファッションを意識する女性たちは、相互評価の中でたやすく一体感をもつし、熱心な釣り師ならば、獲物に逃げるためのわずかな勝ち目を与えるといった慣習を奨励する。

大衆社会にみられる各種の文化は、多くの点で、安定し孤立した共同体のそれと似ている。個々の社会的世界には、1つの談話宇宙 a universe of discourse が発達する。関連する経験が一定の方式でカテゴリー化され、それに言及するために専用のシンボルのセットが用いられる。兵士や売春者や薬物中毒者の隠語は、人種的少数派の方言と同様、いっそう大きな共同体の標準的な言語とは異なる。そしてこうした言語的な相違が、部外者からの社会的距離をさらに強調する。個々の社会的世界とは制御された相互反応の宇宙であり、他者の行動の予期を促進する何らかの組織があるアリーナである。したがって個々の社会的世界は

1つの文化圏であるが、その境界は、領土によっても形式的な集団所属によっても設定されず、有効なコミュニケーションの限界によって設定される。

社会的世界とは、1つの秩序だったアリーナ<sup>訳註2)</sup>であり、その上で個々の参加者が履歴を切り拓くことのできる舞台として使われる。そこには特別の行為規範が、価値のセットが、威信の階層 *prestige ladder* が、そして人生への共通の見通しがある——世界観 *Weltanschauung* がある。エリート集団の場合、所属者にしか当てはまらない社交儀礼が発達することさえある。他の者は何かしら人間以下だと片付けられ、彼らからならば行儀の悪い作法すら期待される。職歴は組織されるが、そこには通例、人が見習いから練達へと至る秩序だった連続した段階がある。このような階層と関連して熱意が形成され、その途上にある人は、自分の進捗を、部外者とはではなく先行者と自分との比較によって測定する (17、pp.56-57)。それどころか、さまざまな世界における威信の階層はきわめて異なっているので、どれか1つで成功の頂点に達した者も、別のどこかではまったく知られていない。個々の世界には異なった歴史的オリエンテーションが発達し、特定関心団体の過去の出来事を選択的に強調する。共通の記憶が構築され強化されるのは、限定されたコミュニケーションのネットワーク内においてである。たとえば世界のあらゆる山岳登山家の伝承の中に、特定の登山家の例外的な勇気と技能や、勇敢な救出や、ありえない不都合に抗した偉大な達成についての話がある。ヒマラヤのさまざまな最高峰を狙った人々の断固とした決断も、ただこうした文脈の中でのみ理解されうる。

同じ共同体に暮らして一定数のやり取りで協同してすらい人々であっても、実際には別の観衆に志向している。この事実から、我々の社会には多くの誤解が生じている。たとえば、大学の教授団では、学内の争いは一般的である。リベラルアーツ・カレッジの研究においてゲールドナー (16) は、いくつかの異なる職歴を取り出している。ある教授たちは強い忠誠心をカレッジ共同体に抱き、さまざまなキャンパス活動に参加していた。他の教授たちは、管理的な職歴を追求して、官僚的なヒエラルキー内での昇進をもっとも得やすいように行動していた。さらに別の教授たちは、自分自身の個々の専門領域に献身していた。工場の技術的専門家と同様、彼らも時には、「会社の人間」ではないのでは、と

疑われた。というのも、彼らはたえず過大な教育負担と研究機会の不足に不満を述べていたからだ。すべての教授たちは、表面上では類似の価値にコミットしていたが、明らかにこれらの人々は異なる熱意をもって、異なる社会的世界での地位を追求し、本当には相互に理解しあっていなかった。したがって、多元的社会では、人々が、隣人には理解不能な目標を追求することも珍しくない。

パースペクティブはコミュニケーションの産物であるから、それが帰せられる集団が、現実社会に本当に実在する必要はない。大多数の人々は、自分が直接に連携している人たちに帰せられた見解に強く反応しがちであるが、準拠集団は想像上のものでもありうる——「時代の先にいる」と主張するアーティストや、「人間性」のために働くという科学者や、「後世」に残すという博愛主義者の場合のように。これらの個人は、直接の報酬には無関心であり、時には、いま生きている人たちよりたぶん思慮深いかもしれない何らかの未来の観衆に賞賛されるのを期待して、恐ろしい犠牲を被ることすらある。彼らは、決して存在しないかもしれない人々に帰せられた、ある仮定された視点から自己イメージを形成する。歴史上の一定の時代を理想化し、「古き良き時代」を求めて遠い過去に生きている人たちもいる。彼らは、ずっと昔に死んでしまった人たちに帰せられた視点から現在の出来事を批判する——南部連合の時代に思いをはせる南部人のように。中世主義者の場合のように、これらの人々はしばしば、自分が熱愛する時代の見通しを、ただ書物だけを通して得ている。不満な人々が精神病者と違うのは、彼らの想像上のパースペクティブが、一般に、視野においていっそう限られており、特定活動に関与するときに限って用いられるからである。私的な世界と、合意された「現実」との相違についても、さらに明瞭な自覚がみられる。

### 同調性と重要な他者

簡単に観察しても、アメリカ人がそれで生きている規準の驚くべき多様性が分かる。いくつものコミュニケーション・チャンネルに誰もがたやすく参加できるので、各人はいくつものパースペクティブを発達させるだろう。その人が新しいチャンネルに参加するたびに——新しい定期刊行物を購読し、新しい友人の輪 circle に参加し、あるいは初めてテレ

び装置を購入するとき——その人は、なにがしか異なった社会的世界に紹介される。どんな個人にも、自分が定期的に関与するコミュニケーション・ネットワークと同じだけの準拠集団がある。もちろん人々は、その参加の範囲によっても異なる。各人は自分が中心にある1つの環境内に生きており、その人に効力をもつ周囲の大きさは、ニュースがその人に到達する方角と距離とで定義される。さらに加えて、社会的世界の固有の組み合わせは各人ごとに異なっている。ジンメル (39, pp.127-195) は、各個人はその人の社会圏 social circle が交差する固有の組み合わせ地点の上に立っている、と指摘した。この地理的な比喩は巧妙である。というのも、このことで我々は、大量の組み合わせの可能性や、各圏でのさまざまな参加度合いを想定できるからだ。

各人がいくつものパースペクティヴを獲得するとき、不一致で対立しあう定義が現れることになる。けれども、このことは困難にはつながらず、通例気づかれないうままで通用する。ある個人の準拠集団のほとんどは、相互に支持し合う。危険な任務に志願する兵士は家族に不安を喚起するだろうが、その価値に反して行為してはいない。彼の家族も仲間も、勇気は尊敬し臆病を軽蔑するからだ。さらに、諺という妻の前では従順な職員の恐ろしさの場合のように、たとえある人の行動が不一致でも、そのやり取りが切り離された文脈で生じていれば気づかれない。多元的社会で生きる人は、コンパートメント化された人生を生きることになり、必ずしも関連し合っていない一連のやり取りに参加する中で、あるパースペクティヴから別のそれへと移行していく。個々の社会的世界で、彼らはなにがしか異なった役割を果たし、自分のパーソナリティーの異なる側面をあらわにする。さらに、ボット (2, pp.192-216) は、対立する規範に直面した人々が、適切な行動様式の自分自身のバージョンを構成してから、そのモデルを一定の集団に当てはめがちであることを発見している。これは、人々は自分の基本的な信念と一致しない観察は合理化しがちである、というバーチャード (3) とエドワーズ (10) の知見とも一致している。

人々が見通しの違いを鋭く意識するのは、対立する要求が自分に向けてなされるが、その全てを満たすことはおそらくできない状況にとらわれたときだけである。キリアンはその災害の研究 (22) において、警察官、消防士、公共事業の労働者が、突然、予期しないジレンマに直面す

ると報告している。彼らは自分自身の家族の安全を懸念するが、自分の仕事についていないと、交通制御や消火活動や救出救援作業には手痛い遅延が生じる。キャンベルとペティグラー（6）は、1959年の学校統合危機の間の、アーカンソー州リトルロックにおけるプロテスタント派牧師たちの困った立場を記述している。彼らの大多数は個人的には統合を望んでいたが、会衆の少なくとも一部を失うことなしには、それを率直に語れなかった。個々の聖職者たちは、その教会がどれだけ繁栄しているかで判断されたので、自分の会衆からの支援なしにはこの職業で成功できなかった。けれども、ほとんどの人々にとって、このような対立は、束の間のものである。ときおり、そうでなければ気づかれなかった矛盾が公開されて、苦痛な選択が強制される。しかし、ある人々にとっては、このような対立は慢性的に悩ませるものである——つまり境界的な地位を占める人々にとっては。移民の子供（30、pp.345-392）、工場の現場監督（47）、高学歴の女性（23）——その全員が、組織された構造の隙間に生きている。生活のコンパートメント化にもかかわらず、境界人の間では、個人的な不適応がしばしばみられる。というのも、彼らは、どのようにしても、どれかの準拠集団の規範を侵犯しないわけにいかないからだ（17、102-115）。

地位のジレンマと矛盾は、準拠集団の間での選択を強いる。本質的に、このような対立は、同一の状況を定義する異なった選択肢があるということであり、選択肢が生じるのは、それに対して行使されうる2つ以上のパースペクティヴの各々からである。ジェームズ（18、p.295）の言葉では、「人間として私はあなたに同情するが、職員としてはどんな慈悲も示すわけにいかない。政治家として私は彼を盟友とみなすが、道徳家としては彼を嫌悪する」。別個の社会的世界で役割を演じるにあたって、不一致な期待は別個の観衆に帰せられ、それらの相違が妥協させられないこともある。問題は、状況を定義するにあたって用いられるパースペクティヴを、どう選択するかということになる。

こうした環境下では、どのような根拠で選択が行われるのだろうか？ ひとつの広く受け入れられた仮説が、小集団の実験研究から得られている。ある個人は、自分がいっそう魅力的だと感じる集団の規範に従う傾向がある。フェスティンガーと協力者たち（13）は、いっそう魅力的な集団にいる被験者は、他の構成員が自分に反対だと知ると、誰かが影響

を与えようとする以前ですら、自分の意見を変更する傾向を報告している。同様にマートン (28, pp.288-292) は、自分が熱望する集団の会員になる資格がある人は、その要求にいつそう反応しやすいことを示唆している。ディット (9) はまた、ある個人がある集団からどれだけ影響されるかは、その魅力に依存していることを発見した。けれども彼はまた、低レベルの自尊心を持つ者が、集団意見にいつそう敏感であることも発見している。明らかに、ある人々は、他の人々よりもいつそう切実に、威信をもった集団の支援を必要としている。

もうひとつの有望な仮説は、必ずしも第1のものと不一致ではないが、精神分析学 (14) とクーリー (7, pp.81-135) およびミード (27, pp.144-164) の著作から引き出されるものだ。すなわち、定義の選択は、準拠集団の代表としてはたらく重要な他者に対する個人の感情 sentiment に依存する。「重要な他者」とは、サリヴァン (41, 18-22) にとっては、ある個人の社会化に直接に責任のある個人ということである。あらゆる種類の規則になった意味は、社会的な文脈の中で学習される。さまざまな対象への我々のオリエンテーションは、特定の人々と相互作用する中で形成される。そしてこれらの親密なやりとりは、融合し同化していくマトリックスとして持続し、それを通して我々は、自分の宇宙を理解できる。ある特定のパースペクティブがどこまで用いられるかは、こうした個人に対して発達する感情に依存する。愛情と配慮をもって扱われてきたと感じる人は、通例、自分の個人的な義務があらゆる環境下で拘束力をもつとみなして、従わないのは困難だと思う。けれども感情が否定的ならば、その人は、師匠の期待を拒否することで、彼らへの意趣返しに出るかもしれない。現実の人々からなんらか孤立している人は、想像上の擬人化への忠誠心の感覚を発達させ、それに全ての信念を帰属させるかもしれない。あるいはそのような人は、自分が大いに尊敬する著者の本から学習した、抽象的な原理のセットに献身するかもしれない。

証拠はまったく確定的とはいえないが、多くのパースペクティブの変容は、重要な他者の置き換えを伴うようにみえる。政治的宗教的な転向では、見通しの著しい変更が生じる。転向者の自伝には、臨床研究と同様に、典型的な自然誌が明らかにされている。通例は、対人関係の障害で特徴づけられる長い欲求不満の時期がある。その人は、次第に自己を

疎外するようになり、しばしば家族を拒否し、友人を見捨てる。そして「迷える魂」は、多くは偶然に、新しいコミュニケーション・チャンネルに出会って、人生を見る別の方式に気づく。経験が再分類されて、転向者は新しい自己認識を形成する (19, pp.77-253)。それから、これらの新しい意味は、別の重要な他者の一団によって強化されるが、彼らからの共感的な支援は、明らかに全ての転向の重要部分である。同様のパターンは、「アルコールクス・アノニマス」〔禁酒互助会：訳註〕で生じるめざましい変化にもみられる。この集団では、新人は、さらに新しい転向者を補助するように勧められ、それによってさらに、自分自身を尊敬されるに値するとみることができるようになる (34)。もっと大々的な見通しの変化は、精神病の発症と、その症状からの回復にみられる。精神病の始まりの初期局面は、やはり重要な他者からの離間で特徴づけられ、回復は、しばしば精神科医との親密な結びつきの確立を含んでいる (36)。このことからパーク (4, pp.125-147) は、精神分析療法を「世俗的な改宗」と呼び、患者は新しい動機の語彙を習得して、それで別視点から自分自身を再評価できるようになると述べた。より大々的ではない変容が、仲間の変更と関連していることを、ニューカム (29) とパーリン (31) が発見した。

社会的団結性の研究もまた、集団規範への同調性が、好ましい対人関係と関連することを明らかにしている。個々人には独立した行為ができるのだから、どんな集団の存続も、その規範への参加者の持続的な同調性に依存している。十分なだけの人々が逃亡すれば、集合的なパターンは崩壊する。人種的少数派は党派へと分裂し、次第に多くの構成員が同化されるにつれ、最終的には消滅する。最初に同化されるようになる人々は、概して、その少数派集団内で他者から疎外されていた人々である (44, pp.105-106)。また、軍隊での士気の研究では、戦友と親密に結びついた人々は、彼らを失望させるよりは死の危険をおかすということが示されている。しかし墮落した部隊は、高一度合いの個人主義で特徴づけられる。人々は相互不信に陥り、不必要な危険をおかすことを拒否する。誰もが自分の私利私欲を追求し、集団は最初の深刻な逆境によって崩壊する (26, 38)。

文化は静止した実体ではない。規範は、参加者たちの相互作用の中で、日々再確認される (35, pp.104-106)。やり取りに参加する人々は、所与

の期待をもってお互いにアプローチし、そして予期されたことが実際に生じることで、彼らのオリエンテーションが裏づけられ強化される。こうして共通の文化を分有する人々は、期待されるやり方で各人が他者に反応することで、相互のパースペクティブをたえず支持している。しかし大衆社会では、他者からの反応はしばしば多様であるため、一定の視点を支持するためには誰の反応が必要なのかを特定することが問題になる。社会的エリートの人々は、かりに「もの知らずたち」が自分のしていることを理解せずとも、気にはしないだろう。人々は、自分の準拠集団に含まれる人たちの反応に対してだけ、選択的に反応する。というのも、彼らが自分の立場を維持しようとするのは、主として彼らの視線に対してだからである。各人は、自分の世界で認められることを求めている。

## 要約と結論

ある人が何をするかを理解するために、我々は、その人の状況の定義をある程度理解する必要がある。そしてこのためには、彼が何を当然のこととしているかを、多少とも知ることが必要になる。このことは多元的社会ではとりわけ当てはまるが、そこでは、異なる人々が同一状況に多様な立場からアプローチし、同一個人でも別のやり取りには別のパースペクティブを利用する。したがって、ある人がそこに向けて遂行している観衆を特定できることが、決定的に重要な課題となる。通例、観衆は、やり取りに関与する他の人々からなるが、いつでもそうではない。その場に直接に示されない観衆もまた社会統制を行使する。そして、この理由から「準拠集団」の概念は、大衆社会の研究においてきわめて重要なものとなる。

さらなる探究はどの方向で行われるべきだろうか？ ある社会学者たちは、組織された集団構造のいっそう詳細な研究を主張しているが、そうした知識が望まれることは議論のしようがない。けれども、考察してきた理論は、我々の注目を別の方向に向ける。1つの課題は、パースペクティブの実証的な研究のための、いっそう有効な技法を開発することだ。これはおそらく、バーク (4)、ランドグレーブ (24)、そしてマンハイム (25) のような触発的な議論に基づくだろう。第2に我々は、コ



コミュニケーション・チャンネルの形成、維持、そして消滅についてさらに知らなければならない。コミュニケーション・チャンネルは単なる伝達経路ではない。それは、誰が誰に何の話題をどれだけの信頼をもって話すか、に関する共通の理解からなりたつ。カッツとラザースフェルド(20)やエメリーとオーサー(11)の研究は、思慮深い出発点を提供しているが、なされるべき多くが残っている。第3に、探究の最も困難な領域のひとつは、知覚と対人関係の関係の研究である。近年の調査が明らかにするところでは、何が知覚されるかは感情と関連している。ウィットライク(46)は、「ホーニー現象」の研究において、他の誰もがグロテスクに歪んだ比率で現れる特別の実験室に置かれても、尊敬された愛情の対象である人々は歪曲されて現れないことを発見している〔錯視を起こさせる「エームズの部屋 Ames room」内では、物体の大小などが歪んでみえるが、馴染みの人物ではこれが起こりにくいという現象で、発見者のニックネームからこう呼ばれる：訳註〕。人々とパースペクティブとの関係性は、いまだ明瞭に理解されていない。とはいえ、一定の結びつきがあると結論するのに充分なだけの証拠がある。この方向での探究は、間違いなく、大衆社会における社会統制について、よりよい理解を我々にもたらすだろう。

#### 原註

- 1) この論文は、「パースペクティブとしての準拠集団」の全面的な改稿版である。“Reference Groups as Perspectives,” *American Journal of Sociology*, Vol.60 (1955), pp.562-569, Copyright 1955 by The University of Chicago.

#### 訳註

- 1) 本論は、Tamotsu Shibutani, “Reference Groups and Social Control,” in Arnold M. Rose (Ed.), *Human Behavior and Social Processes: An Interactionist Approach*, Houghton Mifflin and Routledge, 1962, pp.128-146. の全訳である。同書は相互作用論者の理論を集めた最も初期の論文集として知られる。また本論は、原註にもあるように、著者の事実上のデビュー論文で、ロバート・マートンらとの論争の契機となった「パースペクティブとしての準拠集団」(1955)を全面的に改稿したものである。

広く読まれたパーガーとルックマンの『日常世界の構成』(Peter Berger and Thomas Luckmann, *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*. 原著 1966 年、邦訳 1977 年、筆者は 1967 年のペン

ギン文庫版を参照)は、「現実社会的に構成されるが、知識社会学はこれが起こる過程を分析する」(p.13)と述べている。この意味で同書は、シカゴ社会学と共通する問題関心について、ヨーロッパの政治・社会思想などを多く援用して記されている。同書には一定数のシカゴ社会学への言及もある。本論については、このような「知識社会学の問題への、シンボリック相互作用論からの最も近いアプローチは、我々が知る限り、タモツ・シプタニ『準拠集団と社会統制』……に見いだされる」との指摘がある(pp.217-218, n.25)。ただし、ヨーロッパ系の社会学書でのアメリカ社会学の扱いでは、シカゴ社会学にはあまり言及せず、シンボリック相互作用論という用語を強調することが多い。この関連では、『成城文藝』242～244号に分載された拙論「シカゴ社会学の鍵概念」1～3を参照されたい。

本論は、その初出バージョン「パースペクティヴとしての準拠集団」と同様、戦後シカゴ社会学の最も初期の理論的な貢献とされる。著者シプタニは1948～1951年シカゴ大学で社会学の講師を勤めたのち、新設されたカリフォルニア大学バークレー校の社会学部で1951～1957年まで教鞭をとった。この期間に発表した「パースペクティヴとしての準拠集団」により、シカゴ社会学を「社会的世界の研究」として再度強調するとともに、準拠集団論をめぐるロバート・マートンら機能主義の社会学者との論争を展開した。1957年にUCバークレーを退職し、4年間作家のキャリアを試みたが、1961年の『社会とパーソナリティー 社会心理学への相互作用論者のアプローチ』が成功し、カリフォルニア大学サンタバーバラ校に奉職、以後定年まで在職した。本論は、この直後に上記論文集へ掲載されている(第7章)。

このように、本論は、先行する論文や単行本の蓄積の上に展開されたものだが、「機能」という用語の多用に対する指摘を通して機能主義批判を行なう一方で、現代社会ではマスメディアの発達によって社会的世界の境界を決める地理的な領土が無意味化し、「これらのネットワークはもはや領土的な境界と一致しないので、文化圏は重なり合い、その生態学的な根拠は失われた」と主張して、ロバート・パークらが展開した生態学的アプローチへの修正を求めているととれる。その意味で、当時隆盛を誇っていた機能主義への批判であると同時に、シカゴ社会学をアップデートしようとした試みでもあり、これもまた、編者のアーノルド・ローズが序文で本論を「独創的」と形容した一因だろう。この経緯をクラークは、シプタニは、マートンら「機能主義者との……激しい論争の中で、こういう〔それ以前のシカゴ学派的な生態学的な：訳註〕コミュニティ研究を、社会的世界の研究へと変容させ、明示的な社会的世界の理論の展開を開始させた」と要約した(Clarke, 1991, p.130)。Clarke, A. E., "Social Worlds/Arenas

Theory as Organizational Theory,” in Maines, D. R. (Ed.), *Social Organization and Social Process: Essays in Honor of Anselm Strauss*, Aldine, 1991, pp.119-158.

学説史的に重要な論文であり、今日なお有意義な指摘を含むと考えられることから訳出した。原書は1962年、アメリカではHoughton Mifflin社、英国ではRoutledge & Kegan Paul社から刊行された。本書は全体が「インターネット・アーカイブ (<https://archive.org>)」上で無償公開され(2019年9月再確認)、誰でも無償ダウンロード可能であり、今回も参照した。本書が「アメリカとおそらく他の国においてパブリックドメインにある」ことが明記された複製(新版ではなく初版本の図書館所蔵本の複製)も頒布されている(编者ローズは1968年に亡くなっている)。今回の邦訳のため、当時の出版物の著作権を管理する英国の会社に照会したが、「当該著作のための契約書は見つからず、形式上の許可を与える立場にはない」との回答を得た(2019年7月30日)。本論が原著者の論文集等に再録されたことはない。以上の経緯から、すでにパブリックドメインにある著作と判断し、過去の版元からの記された許可はとくに得ることなく翻訳し刊行する(以上の確認作業は行ってきた)。

著者シブタニ教授は、1985年以来、訳者後藤のアメリカ社会学での師匠であり、ある程度親しい話し相手でもあった(前掲の後藤論文を参照のこと)。著者が本論の日本での翻訳刊行を喜んでくれることは確実である。

- 2) 本論では、社会的世界 social world に加えて、アリーナ arena という用語が使用されている。交渉の場としての社会的アリーナについて、アンセルム・ストラウスを中心に多くの研究が行われるが、この時代にはすでにその発想があったとみるべきだろう。前出クラークは、ストラウスらが1964年の著作(Strauss et al., *Psychiatric Ideologies and Institutions*, Free Press, 1964.)で、「精神科のアリーナ psychiatric arena を……異なる治療上のイデオロギーにコミットした集団(社会的世界)の間での“戦場”と呼んだ」と初期の実例を指摘する。ストラウスが明示的に社会的世界の理論を展開したのは後年のことだが、枠組み自体はより初期の著作から存在したという(Clarke, *op. cit.*, p.129)。事実この1964年の著作の終わり、短く「アリーナ」に触れられている(同書第15章)。「アリーナ」は「社会的世界」と同様、ストラウスと協力者たちの鍵概念であるが、「そこで各種の世界とサブ世界の間で……争点に決着がつけられる行為または競合がおきる比喩的な場のことである」(Suczek B. and Fagerhaugh, S., “AIDS and Outreach Work,” in Maines, D. R. (Ed.), *op. cit.*, p.160.)。なお、ブルーマーが「連携した行為 joint action」と呼んだものを、本論でシブタニは「調和した行為 concerted action」と呼称している。また、レッドフィールドらが用いた人類学用語の cultural area は「文化圏」と訳されることが多

いが、ジンメル用語の *sozialer Kreise* (ラインハート・ベンディックスによる英訳(下記の文献 39)では *social circles* と訳されている) は「社会圏」と訳されることが多く、結果的に、異なる 2 原語について、「圏」という特徴的な 1 訳語が当てられることになる (circle は本論中、「友人の輪」の「輪」などの原語でもある)。以上、注記する。

\* 本論の『成城文藝』への掲載にあたってお世話になった編集委員会と関係者の皆様に感謝します。

#### 参考文献

1. Bagby, James W. "A Cross-Cultural Study of Perceptual Predominance in Binocular Rivalry," *Journal of Abnormal and Social Psychology*, Vol.54 (1957), pp.331-334.
2. Bott, Elizabeth. *Family and Social Network*. London: Tavistock Publications, 1957.
3. Burchard, Waldo. "Role Conflicts of Military Chaplains," *American Sociological Review*, Vol.19 (1954), pp.528-535.
4. Burke, Kenneth. *Permanence and Change*. Los Altos, Calif.: Hermes Publications, 1955.
5. Cameron, Norman, and Ann Magaret. *Behavior Pathology*. Boston: Houghton Mifflin Co., 1951.
6. Campbell, Ernest Q., and Thomas F. Pettigrew. "Racial and Moral Crisis: The Role of Little Rock Ministers," *American Journal of Sociology*, Vol.64 (1959), pp.509-516.
7. Cooley, Charles H. *Human Nature and the Social Order*. New York: Charles Scribner's Sons, 1922.
8. Dewey, John. *Experience and Nature*. Chicago: Open Court Publishing Co., 1926.
9. Dittes, James E. "Attractiveness of Group as Function of Self-Esteem and Acceptance by Group," *Journal of Abnormal and Social Psychology*, Vol.59 (1959), pp.77-82.
10. Edwards, Allen L. "Rationalization in Recognition as a Result of a Political Frame of Reference," *Journal of Abnormal and Social Psychology*, Vol.36 (1941), pp.224-235.
11. Emery, Frederick E., and O. A. Oeser. *Information, Decision, and Action*. Melbourne, Austral.: Melbourne University Press, 1958.
12. Eulau, Heinz. "Identification with Class and Political Role Behavior," *Public Opinion Quarterly*, Vol.20 (1956), pp.515-529.

13. Festinger, Leon, *et al.* "The Influence Process in the Presence of Extreme Deviates," *Human Relations*, Vol.5 (1952), pp.327-346.
14. Freud, Sigmund. *Group Psychology and the Analysis of the Ego*, tr. by James Strachey. London: Hogarth Press, 1945.
15. Goldstein, Bernard. "The Perspective of Unionized Professionals," *Social Forces*, Vol.37 (1959), pp.323-327.
16. Gouldner, Alvin W. "Cosmopolitans and Locals: Toward an Analysis of Latent Social Roles," *Administrative Science Quarterly*, Vol.2 (1957), pp.281-306, Vol.3 (1958), pp.444-480.
17. Hughes, Everett C. *Men and Their Work*. Glencoe, Ill.: The Free Press, 1958.
18. James, William. *The Principles of Psychology*. New York: Henry Holt and Company, 1890, Vol.I.
19. James, William. *The Varieties of Religious Experience*. New York: Modern Library, Inc., 1936.
20. Katz, Elihu, and Paul F. Lazarsfeld. *Personal Influence*. Glencoe, Ill.: The Free Press, 1955.
21. Kelley, Harold H. "Two Functions of Reference Groups," in Guy E. Swanson, Theodore M. Newcomb, and Eugene L. Hartley (eds.), *Readings in Social Psychology*, New York: Henry Holt and Company, 1952, pp.410-414.
22. Killian, Lewis M. "The Significance of Multiple-Group Membership in Disaster," *American Journal of Sociology*, Vol.57 (1952), pp.309-314.
23. Komarovsky, Mirra. "Cultural Contradictions and Sex Roles," *American Journal of Sociology*, Vol.52 (1946), pp.184-189.
24. Landgrebe, Ludwig. "The World as a Phenomenological Problem," *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol.1 (1940), pp.38-58.
25. Mannheim, Karl. *Ideology and Utopia*, tr. by Louis Wirth and Edward Shils. New York: Harcourt, Brace and Co., 1936.
26. Marshall, Samuel L. *Men Against Fire*. New York: William Morrow & Company, 1947.
27. Mead, George H. *Mind, Self, and Society*, ed. by Charles W. Morris. Chicago: The University of Chicago Press, 1934.
28. Merton, Robert K. *Social Theory and Social Structure*. Glencoe, Ill.: The Free Press, 1957.
29. Newcomb, Theodore M. "Attitude Development as a Function of Reference Groups: The Bennington Study," in Muzafer Sherif, *Outline of Social Psychology*. New York: Harper & Brothers, 1948, pp.139-154.
30. Park, Robert E. *Race and Culture*, ed. by E. C. Hughes, *et al.* Glencoe, Ill.: The Free Press, 1950.

31. Pearlin, Leonard I. "Shifting Group Attachments and Attitudes Toward Negroes," *Social Forces*, Vol.33 (1954), pp.47-50.
32. Redfield, Robert. *The Folk Culture of Yucatan*. Chicago: The University of Chicago Press, 1941.
33. Riezler, Kurt. *Man: Mutable and Immutable*. Chicago: Henry Regnery Co., 1951.
34. Ritchie, Oscar W. "A Sociohistorical Survey of Alcoholics Anonymous," *Quarterly Journal of Studies on Alcohol*, Vol.9 (1948), pp.119-156.
35. Sapir, Edward. *Selected Writings in Language, Culture, and Personality*, ed. by David Mandelbaum. Berkeley, Calif.: University of California Press, 1949.
36. Sechehaye, Marguerite (ed.). *Autobiography of a Schizophrenic Girl*, trans. by Grace Rubin-Rabson. New York: Grune & Stratton, 1951.
37. Shils, Edward A. "Primordial, Personal, Sacred, and Civil Ties," *British Journal of Sociology*, Vol.8 (1957), pp.130-145.
38. Shils, Edward A., and Morris Janowitz. "Cohesion and Disintegration in the *Wehrmacht* in World War II," *Public Opinion Quarterly*, Vol.12 (1948), pp.280-315.
39. Simmel, Georg. *Conflict and the Web of Group Affiliations*, tr. by Kurt H. Wolff and Reinhard Bendix. Glencoe, Ill.: The Free Press, 1955.
40. Stern, Eric, and Suzanne Keller. "Spontaneous Group References in France," *Public Opinion Quarterly*, Vol.17 (1953), pp.208-217.
41. Sullivan, Harry S. *Conceptions of Modern Psychiatry*. Washington, D.C.: W. A. White Psychiatric Foundation, 1940.
42. Thomas, William I. *Social Behavior and Personality*, ed. by Edmund H. Volkart. New York: Social Science Research Council, 1951.
43. Turner, Ralph H. "Role-Taking, Role Standpoint, and Reference Group Behavior," *American Journal of Sociology*, Vol.61 (1956), pp.316-328.
44. Vogt, Evon Z. "Navaho Veterans: A Study of Changing Values," *Papers of the Peabody Museum*, Vol.41 (1951).
45. Wirth, Louis. *Community Life and Social Policy*, ed. by E. W. Marvick and A. J. Reiss. Chicago: The University of Chicago Press, 1956.
46. Wittreich, Warren J. "The Honi Phenomenon: A Case of Selective Perceptual Distortion," *Journal of Abnormal and Social Psychology*, Vol.47 (1952), pp.705-712.
47. Wray, Donald E. "Marginal Men of Industry: The Foremen," *American Journal of Sociology*, Vol.54 (1949), pp.298-301.